

コリント人への第二の手紙

第一章 神の御旨によりキリスト・イエスの

使徒となつたパウロと、兄弟テモテとから、コリントにある神の教会、ならびにアカヤ全土にいるすべての聖徒たちへ。

こわしたたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

三 ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることがでさるやうにして下さるのである。五 それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているやうに、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによつて満ちあふれているからである。六 わたしたちが患難に会ふなら、それはあなたがたの慰めと救とのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであつて、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。七 だから、あなたがたに對していただいているわたしたちの望みは、動くことがない。

あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているやうに、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである。

八 兄弟たちよ。わたしたちがアジャで会つた患難を、知らずにいてもらいたくない。わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失つてしまひ、九心のうちで死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至つた。一〇神はこのやうな死の危険から、わたしたちを救ひ出して下さつた、また救ひ出して下さるのである。わたしたちは、神が今後も救ひ出して下さることを望んでいる。二そして、あなたがたもまた祈をもつて、ともに、わたしたちを助けてくれるであらう。これは多くの人々の願ひによりわたしたちに賜わつた恵みについて、多くの人が感謝をささげるやうになるためである。

三 さて、わたしたちがこの世で、ことにあなたがたに對し、人間の知恵によつてではなく神の恵みによつて、神の神聖と眞実とによつて行動してきたことは、実にわたしたちの誇であつて、良心のあかしするところである。四 わたしたちが書いていることは、あなたがたが読んで理解できないことではない。それを完全に理解してくるやうに、わたしは希望する。五すでにある程度わたしたちを理解してくれているとおり、わたしたちの主イエスの日には、あなたがたがわたしたちの誇であるよ

うに、わたしたちもあなたがたの誇りなのである。

二五 この確信をもって、わたしたちはもう一度恵みを得させたいので、まずあなたがたの所に行き、二六 それからそちらを通ってマケドニアにおもむき、そして再びマケドニアからあなたがたの所に帰り、あなたがたの見送りを受けてユダヤに行く計画を立てたのである。二七 この計画を立てたのは、軽率なことであつたであらうか。それとも、自分の計画を肉の思いによつて計画したため、わたしの「しかり、しかり」が同時に「否、否」であつたのだらうか。二八 神の真実にかけて言うが、あなたがたに對するわたしの言葉は、「しかり」と同時に「否」というようなものではない。二九 なぜなら、わたしたち、すなわち、わたしとシルワノとテモテとが、あなたがたに宣傳した神の子キリスト・イエスは、「しかり」となると同時に「否」となつたのではない。そうではなく、「しかり」がイエスにおいて實現されたのである。三〇 なぜなら、神の約束はことごとく、彼において「しかり」となつたからである。だから、わたしたちは、彼によつて「アアメン」と唱えて、神に栄光を帰するのである。三一 あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそいで下さつたのは、神である。三二 神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証として、わたしたちの心に御霊を賜つたのである。

三三 わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言

うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに對して寛大でありたいためである。三四 わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いてゐる者にすぎない。あなたがたは、信仰に堅く立っているからである。

第二章 「そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもつて行くことはすまいと、決心したのである。三六 もしあなたがたを悲しませるとすれば、わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたしを喜ばせてくれるのか。三七 このような事を書いたのは、わたしが行く時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせられたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。三八 わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもつてあなたがたに書きおくれた。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに對してあふれるばかりにだいてゐるわたしの愛を、知ってもらふためであつた。

三九 しかし、もしだれかが人を悲しませたとすれば、それはわたしを悲しませたのではなく、控え目に言うが、ある程度、あなたがた一同を悲しませたのである。四〇 その人にとつては、多数の者から受けたあの処罰でもう十分なのだから、四一 あなたがたはむしろ彼をゆるし、また慰めてやるべきである。そうしないと、その人はますます

す深い悲しみに沈むかも知れない。そこでわたしは、彼に対して愛を示すように、あなたがたに勧める。わたしは書きおくれたのも、あなたがたがすべての事について従順であるかどうかを、ためすためにほかならなかった。もしあなたがたが、何かのことについて人をゆるすなら、わたしもまたゆるそう。そして、もしわたしが何かのことでゆるしたとすれば、それは、あなたがたのためにキリストのみまえてゆるしたのである。二そうするのは、サタンに欺かれることのないためである。わたしたちは、彼の策略を知らないわけではない。

三さて、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、わたしのために主の門が開かれたにもかかわらず、兄弟テトスに会えなかったので、わたしは気が気でなく、人々に別れて、マケドニアに出かけて行った。四しかるに、神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に放って下さるのである。五わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである。六後者にとつては、死から死に至らせるかおりであり、前者にとつては、いのちからいのちに至らせるかおりである。いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか。七しかし、わたしたちは、多くの人のように神の言を売物にせず、真心をこめて、神につかわされた者として神

のみまえて、キリストにあつて語るのである。のみまえて、キリストにあつて語るのである。八
第三章 一わたしたちは、またもや、自己推薦をし始めているのだろうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいは、あなたがたからの推薦状が必要なのだろうか。二わたしたちの推薦状は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にするされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。三そして、あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であつて、墨によらず生ける神の霊によつて書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。四こうした確信を、わたしたちはキリストにより神に對していだいてゐる。五もちろん、自分自身で事を定める力が自分にある、と言うのではない。わたしたちのこうした力は、神からきている。六神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺し、霊は人を生かす。七もし石に彫りつけた文字による死の務が栄光のうちに行為れ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去るべき栄光のゆえに、その顔を見つめることができなかったとすれば、八まして霊の務は、はるかに栄光あるものではなからうか。九もし罪を宣告する務が栄光あるものだとするれば、義を宣言する務は、はるかに栄光に満ちたものである。

「そして、すでに栄光を受けたものも、この場合、はるかにまさった栄光のまえに、その栄光を失ったのである。二もし消え去るべきものが栄光をもって現れたのなら、まして永存すべきものは、もっと栄光のあるべきものである。」

三こうした望みをいだいているので、わたしたちは思いついて大胆に語り、三そしてモーセが、消え去っていくものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけたようなことはしない。四実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、彼らが古い契約を朗読する場合、その同じおおいが取り去られないままに残っている。それは、キリストにあつてはじめて取り除かれるのである。五今日に至るもお、モーセの書が朗読されるたびに、おおいが彼らの心にかかつている。六しかし主に向く時には、そのおおいは取り除かれる。七主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。八わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」

第四章 「このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せずに、恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみまえに、

すべての人の良心に自分を推薦するのである。三もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとつておおわれているのである。四彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを見えなくしているのである。五しかし、わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。六「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。」

七しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。八わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。九迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。一〇いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。二わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。三こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。」

「三」わたしは信じた。それゆえに語った」としるしてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。二四それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。二五すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

一六だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。一七なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。一八わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。

第五章 一わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいたたく建物、すなわち天にある人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。二そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。三それを着たなら、裸のままではいないことになる。四この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ぎ捨て願う

からではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためである。五わたしたちを、この事にかたう者にして下さったのは、神である。そして、神はその保証として御霊をわたしたちに賜ったのである。六だから、わたしたちはいつも心強い。そして、肉体を宿としている間は主から離れていることを、よく知っている。七わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。八それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。九そういうわけだから、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。一〇なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。

二このようにわたしたちは、主の恐るべきことを知っている。三人々に説き勧め。わたしたちのことは、神のみまえには明らかにしている。さらに、あなたがたの良心にも明らかにしよう。四望む。三わたしたちは、あなたがたに対して、またもや自己推薦をしようとするのではない。ただわたしたちを誇る機会を、あなたがたに持たせ、心を誇るのではなくうわべだけを誇る人々に答えるようにさせたいのである。三もしわたした

ちが、気が狂っているのなら、それは神のためであり、気が確かであるのなら、それはあなたがたのためである。二四なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。わたしたちはこう考えている。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである。二五そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである。

二六それだから、わたしたちは今後、だれをも肉によって知ることはいさまい。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても、今はもうそのような知り方をすまい。二七だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。二八しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによつて、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。二九すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである。

三〇神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代つて願う、神の和解を受けなさい。三神は

わたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。

第六章 一わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。二神はこう言われる、

「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救の日にあなたを助けた」。

見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。三この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、四かえつて、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、五むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、六真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、七真理の言葉と神の力により、左右に持っている義の武器により、八ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、九人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、一〇悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようである

が、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っていく。

二コリントの人々よ。あなたがたに向かつてわたしたちの口は開かれており、わたしたちの心は広くなっている。三あなたがたは、わたしたちに心をせばめられている。四わたしは、自分で心をせばめていたのだ。五わたしは子供たちに対するように言うが、どうかあなたがたの方でも心を広くして、わたしに應じてほしい。

六不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。七キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。八神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、

「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。」

そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。

九だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。」

そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。

一〇そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、

わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる。

第七章 一愛する者たちよ。わたしたちは、こ

のような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなるうではないか。

二どうか、わたしたちに心を開いてほしい。わたしたちは、だれにも不義をしたことがなく、だれをも破滅におとし入れたことがなく、だれからもだまし取ったことがない。三わたしは、責めるつもりでこう言うのではない。前にも言ったように、あなたがたはわたしの心のうちにいて、わたしたちと生死を共にしているのである。四わたしはあなたがたを大いに信頼し、大いに誇っている。また、あふれるばかり慰めを受け、あらゆる患難の中にあって喜びに満ちあふれている。

五さて、マケドニヤに着いたとき、わたしたちの身に少しの休みもなく、さまざまの患難に会い、外には戦い、内には恐れがあった。六しかるに、うちしおれている者を慰める神は、テトスの到来によって、わたしたちを慰めて下さった。七ただ彼の到来によるばかりではなく、彼があなたがたから受けたその慰めをもって、慰めて下さった。すなわち、あなたがたがわたしを慕っていること、嘆いていること、またわたしに対して熱心であることを知らせてくれたので、わたしの喜びはいよいよ増し

加わったのである。二そこで、たとい、あの手紙であな
たがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いてい
ない。あの手紙がしばらくの間ではあるが、あなたがた
を悲しませたのを見て悔いたとしても、九今は喜んでい
る。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲し
んで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがその
ように悲しんだのは、神のみところに添うたことであつ
て、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのであ
る。三神のみところに添うた悲しみは、悔いのない救を
得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせ
る。二見よ、神のみところに添うたその悲しみが、どん
なにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、
義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたこと
か。あなたがたはあの問題については、すべての点にお
いて潔白であることを証明したのである。三だから、わ
たしがあなたがたに書きおくれたのは、不義をした人の
ためでも、不義を受けた人のためでもなく、わたしたち
に対するあなたがたの熱情が、神の前にあなたがたの間
で明らかになるためである。三三こういふわけで、わたし
たちは慰められたのである。これらの慰めの上にテトス
の喜びが加わって、わたしたちはなおいっそう喜んだ。
彼があなたがた一同によって安心させられたからであ
る。四そして、わたしは彼に対してあなたがたのことを
少しく誇ったが、それはわたしの恥にならないですん

だ。あなたがたにいつさいのことを真実に語ったように、
テトスに対して誇ったことも真実となつてきたのであ
る。一五また彼は、あなたがた一同が従順であつて、おそ
れおののきつつ自分を迎えてくれたことを思い出して、
ますます心をあなたがたの方に寄せている。一六わたしは、
あなたがたに全く信頼することができて、喜んでゐる。

第 八 章 一兄弟たちよ。わたしたちはここで、

マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたが
たに知らせよう。二すなわち、彼らは、患難のために激
しい試練をうけたが、その満ちあふれる喜びは、極度の
貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富と
なつたのである。三わたしはあかしするが、彼らは力に
応じて、否、力以上に施しをした。すなわち、自ら進ん
で、四聖徒たちへの奉仕に加わる恵みにあずかりたいと、
わたしたちに熱心に願ひ出て、五わたしたちの希望どお
りにしたばかりか、自分自身をまず、神のみところにし
たがつて、主にささげ、また、わたしたちにもささげた
のである。六そこで、この募金をテトスがあなたがたの
所で、すでに始めた以上、またそれを完成するようにと、
わたしたちは彼に勧めたのである。七さて、あなたがた
があらゆる事からについて富んでいるように、すなわち、
信仰にも言葉にも知識にも、あらゆる熱情にも、また、
あなたがたに対するわたしたちの愛にも富んでいるよう
に、この恵みのわざにも富んでほしい。八こう言つても、

わたしは命令するのではない。ただ、他の人たちの熱情によつて、あなたがたの愛の純真さをためそうとするのである。九あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによつて富む者になるためである。一〇そこで、わたしは、この恵みのわざについて意見を述べよう。それがあなたがたの益になるからである。あなたがたはこの事を、昨年以來、他に先んじて実行したばかりではなく、それを願っていた。二だから今、それをやりとげなさい。あなたがたが心から願っているように、持つているところに応じて、それをやりとげなさい。三もし心から願つてそうするなら、持たないところによらず、持つているところによつて、神に受けいれられるのである。四それは、ほかの人々に樂をさせて、あなたがたに苦勞をさせようとするのではなく、持ち物を等しくするためである。五すなわち、今の場合は、あなたがたの余裕がある人たちの欠乏を補い、後には、彼らの余裕があなたがたの欠乏を補い、こうして等しくなるようにするのである。六それは「多く得た者も余ることがなく、少ししか得なかった者も足りないことはなかった」と書いてあるとおりである。

七わたしはあなたがたに対して持つている同じ熱情を、テトスの心にも与えて下さった神に感謝する。二七彼

はわたしの勧めを受けいれ、そして更に熱心になつて、自分から進んであなたがたのところに行つた。一八わたしたちはまた、テトスと一緒に、ひとりの兄弟を送る。この兄弟が福音宣伝の上で得たほまれは、すべての教会に聞えてゐるが、一九そのうえ、彼は、主ご自身の榮光があらわれるため、また、わたしたちの好意を示すために、骨を折つて贈り物を集めてゐるわたしたちの同伴者として、諸教会から選ばれたのである。二〇そうしたのは、わたしたちが集めてゐるこの寄附金のことについて、人にかれこれ言われるのを避けるためである。二一わたしたちは、主のみまえばかりではなく、人の前でも公正であるように、氣を配つてゐるのである。二二また、もうひとりの兄弟を彼らと一緒に送る。わたしたちは、多くの事について彼が熱心であつたことを、たびたび認めた。彼は今、あなたがたを非常に信頼して、ますます熱心になつてゐる。二三テトスについて言えば、彼はわたしの仲間であり、あなたがたに対するわたしの協力者である。この兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の使者、キリストの榮光である。二四だから、あなたがたの愛と、また、あなたがたについてわたしたちがいだいてゐる誇りが、真実であることを、諸教会の前で彼らにあかししていただきたい。

第九章

一聖徒たちに対する援助については、いまさら、あなたがたに書きおくる必要はない。二わた

しは、あなたがたの好意を知っており、そのために、あなたがたのことをマケドニアの人々に誇って、アカヤでは昨年以來、すでに準備をしているのだと言った。そして、あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させたのである。三 わたしが兄弟たちを送ることにしたのは、あなたがたについてわたしたちの誇ったことが、この場合むなしくならないで、わたしが言ったとおり準備していてもいたからである。四 そうでないで、万一マケドニア人がわたしと一緒に行って、準備ができていないのを見たら、あなたがたはもろろん、わたしたちも、かように信じきっていただけに、恥をかくことになる。五 だから、わたしは兄弟たちを促して、あなたがたの所へ先に行かせ、以前あなたがたが約束していた贈り物の準備をさせておくことが必要だと思った。それをしぶりながらではなく、心をこめて用意してはほしい。

六 わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。七 各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。八 神は喜んで施す人を愛して下さるのである。九 神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。

九 彼は貧しい人たちに散らして与えた。

その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりである。二 種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。三 こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。三 なぜなら、この援助の働きは、聖徒たちの欠乏を補うだけではなく、神に対する多くの感謝によってますます豊かになるからである。三 すなわち、この援助を行なった結果として、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であることや、彼らにも、すべての人にも、惜しみなく施しをしていることがわかってきて、彼らは神に栄光を帰し、四 そして、あなたがたに賜わったきわめて豊かな神の恵みのゆえに、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのである。五 言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する。

第一〇章 「さて、「あなたがたの間にいて面と向かつてはおとなしいが、離れていると、気が強くなる」このパウロが、キリストの優しさ、寛大さをもって、あなたがたに勧める。二 わたしたちを肉に従って歩いていくのかのように思っている人々に対しては、わたしは勇敢に行動するつもりであるが、あなたがたの所では、どうか、そのような思いきったことをしないですむようであ

りたい。三わたしたちは、肉にあつて歩いてはいるが、肉に従つて戦つてゐるのではない。四わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、五神の知恵に逆らつて立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ、六そして、あなたがたが完全に服従した時、すべて不従順な者を処罰しようと、用意してゐるのである。

七あなたがたは、うわべの事だけを見ている。もしある人が、キリストに属する者だと自任してゐるなら、その人はもう一度よく反省すべきである。その人がキリストに属する者であるように、わたしたちもそうである。八たとい、あなたがたを倒すためではなく高めるために主からわたしたちに賜わった権威について、わたしがやや誇りすぎたとしても、恥にはなるまい。九ただ、わたしは、手紙であなただかたをおどしてゐるのだと、思われたくはない。一〇人は言う、「彼の手紙は重味があつて力強いが、会つて見ると外見は弱々しく、話はつまらない。」一〇二そういう人は心得てゐるがよい。わたしたちは、離れていて書きおくる手紙の言葉どおりに、一緒にゐる時でも同じようにふるまうのである。一二わたしたちは、自己推薦をするような人々と自分を同列においたり比較したりはしない。彼らは仲間同志で互にはかり合ったり、

互に比べ合つたりしてゐるが、知恵のないしわざである。一三しかし、わたしたちは限度をこえて誇るようなことはしない。むしろ、神が割り当て下さった地域の限度内で誇るにすぎない。わたしはその限度にしたがつて、あなたがたの所まで行つたのである。一四わたしたちは、あなたがたの所まで行けない者であるかのように、むりに手を延ばしてゐるのではない。事実、わたしたちが最初にキリストの福音を携えて、あなたがたの所までも行つたのである。一五わたしたちは限度をこえて、他人の働きを誇るようなことはしない。ただ、あなたがたの信仰が成長するにつれて、わたしたちの働きの範囲があなたがたの中ですます大くなることを望んでゐる。一六こうして、わたしたちはほかの人の地域ですでになされてゐることを誇ることはせずに、あなたがたを越えたさきさきにまで、福音を宣べ伝えたい。一七誇る者は主を誇るべきである。一八自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確かな人なのである。

第一一章 一わたしは少しばかり愚かなことを言うのを、どうか、忍んでほしい。もちろん忍んでくれるのだ。二わたしは神の熱情をもって、あなたがたを熱愛してゐる。あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとりの男子キリストにささげるために、婚約させたのである。三ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに

対する純情と貞操とを失いはしないかということである。四 というのは、もしある人がきて、わたしたちが宣べ伝えもしなかったような異なるイエスを宣べ伝え、あるいは、あなたがたが受けたことのない違った霊を受け、あるいは、受け入れたことのない違った福音を聞く場合に、あなたがたはよくもそれを忍んでいる。五 事実、わたしは、あの大使徒たちにいささかも劣ってはいないと思う。六 たとい弁舌はつたなくても、知識はそうでない。わたしは、事ごとくに、いろいろの場合に、あなたがたに對してそれを明らかにした。

七 それとも、あなたがたを高めるために自分を低くして、神の福音を働かしにあなたがたに宣べ伝えたことが、罪になるのだろうか。八 わたしは他の諸教会をかすめたと言われながら得た金で、あなたがたに奉仕し、九 あなたがたの所にいて貧乏をした時にも、だれにも負担をかけたことはなかった。わたしの欠乏は、マケドニヤからきた兄弟たちが、補ってくれた。こうして、わたしはすべての事につき、あなたがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後とも努めよう。一〇 わたしの内にあるキリストの眞実にかけて言う、この誇がアカヤ地方で封じられるようなことは、決してない。二 なぜであるか。わたしはあなたがたを愛していないからか。それは、神がご存じである。

三 しかし、わたしは、現在していることを今後もして

いこう。それは、わたしたちと同じように誇りうる立場を得ようと機会をねらっている者どもから、その機会を断ち切ってしまうためである。三 こういう人々には使徒、人をだます働き人であつて、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。四 しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。五 だから、たといサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなる。六

七 繰り返して言うが、だれも、わたしを愚か者と思わないでほしい。もしそう思うなら、愚か者あつかいにされてもよいから、わたしにも、少し誇らせてほしい。七 いま言うことは、主によつて言うのではなく、愚か者のように、自分の誇とするところを信じきつて言うのである。八 多くの人が肉によつて誇っているから、わたしも誇ろう。九 あなたがたは賢い人たちのだから、喜んで愚か者を忍んでくれるだろう。一〇 実際、あなたがたは奴隷にされても、食い倒されても、略奪されても、いばられても、顔をたたかれても、それを忍んでいる。三言うのも恥ずかしいことだが、わたしたちは弱すぎたのだ。もしある人があえて誇るなら、わたしは愚か者になつて言うが、わたしもあえて誇る。三 彼らはヘブル人なのか。わたしもそうである。彼らはイスラエル人なのか。わたしもそうである。彼らはアブラハムの子孫な

のか。わたしもそうである。三彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである。苦勞したことはもっと多く、投獄されたことももっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった。二ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、二五ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。二六幾たびも旅をし、川の難、盜賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、二七勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。二八なおいりゐるの事があつた外に、日々わたしに迫つて来る諸教会の心配ごとがある。二九だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか。三〇もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを誇らう。三一永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言つていないことを、ご存じである。

三二ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視したことがあつたが、三三その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのがれた。

第一二章 「わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあるうが、主のまぼろしと啓示とについて語る。二わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた——それが、からだのままであつたか、わたしは知らない。からだを離れてであつたか、それも知らない。神がご存じである。三この人が——それが、からだのままであつたか、からだを離れてであつたか、わたしは知らない。神がご存じである——四パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。五わたしはこういう人について誇る。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。六もっとも、わたしは誇らうとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶられるかも知れないから。七そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。八このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるやうにと、三度も主に祈つた。九ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだ

から、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。二だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。

三わたしは愚か者となった。あなたがたが、むりにわたしをそうしてしまったのだ。実際は、あなたがたから推薦されるべきであった。というのは、たといわたしは取るに足りない者だとしても、あの大使徒たちにはなんら劣るところがないからである。三わたしは、使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくくして、あなたがたの間であらわしてきた。三いったい、あなたがたが他の教会よりも劣っている点は何か。ただ、このわたしがあなたがたに負担をかけなかったことだけではないか。この不義は、どうか、ゆるしてもらいたい。四さて、わたしは今、三度目にあなたがたの所に行く用意をしている。しかし、負担はかけないつもりである。わたしの求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身なのだから。いったい、子供は親のために財をたくわえて置く必要はなく、親が子供のためにたくわえて置くべきである。一五そこでわたしは、あなたがたの魂のためには、大いに喜んで費用を使い、また、わたし自身をも使いつくそう。わたしがあなたがたを愛すれば愛するほど、あなたがたからますます愛されなくな

るのであろうか。一六わたしは、あなたがたに重荷を負わせなかったとしても、悪がしこくて、あなたがたからだまし取ったのだと、人は言う。三わたしは、あなたがたにさわした人たちのうちのだれかをとおして、あなたがたからむさぼり取っただろうか。一八わたしは、テトスに勧めてそちらに行かせ、また、かの兄弟を同行させた。テトスは、あなたがたからむさぼり取ったことがあるのか。わたしたちは、みな同じ心で歩いたではないか。同じ足並みで歩いたではないか。

一九あなたがたは、わたしたちがあなたがたに対して弁明をしているのだと、今までずっと思ってきたであろう。しかし、わたしたちは、神のみまえてキリストにあって語っているのである。愛する者たちよ。これらすべてのことは、あなたがたの徳を高めるためなのである。三わたしは、こんな心配をしている。わたしが行ってみると、もしかしたら、あなたがたがわたしの願っているような者ではなく、わたしも、あなたがたの願っているような者でないことになりはすまいか。もしかしたら、争い、ねたみ、怒り、党派心、そしり、さんげん、高慢、騒乱などがありはすまいか。三わたしが再びそちらに行つた場合、わたしの神が、あなたがたの前でわたしに恥をかかせ、その上、多くの人が前に罪を犯していながら、その汚れと不品行と好色とを悔い改めていないので、わたしを悲しませることになりはすまいか。

第一章 三章 一わたしは今、三度目にあなたがたの

所に行こうとしている。すべての事がらは、ふたりか三人の証人の証言によって確定する。二わたしは、前に罪を犯した者たちやその他のすべての人々に、二度目に滞在していたとき警告しておいたが、離れている今またあらかじめ言うておく。今度行った時には、決して容赦はしない。三なぜなら、あなたがたが、キリストのわたしにあって語っておられるという証拠を求めているからである。キリストは、あなたがたに対して弱くはなく、あなたがたのうちにあって強い。四すなわち、キリストは弱さのゆえに十字架につけられたが、神の力によって生きておられるのである。このように、わたしたちもキリストにあって弱い者であるが、あなたがたに対しては、神の力によって、キリストと共に生きるのである。五あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちににおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。六しかしわたしは、自分たちが見捨てられた者ではないことを、知っていてもらいたい。七わたしたちは、あなたがたがどんな悪をも行わないようにと、神

に祈る。それは、自分たちがほんとうの者であることをみせるためではなく、たといわたしたちが見捨てられた者のようになっても、あなたがたに良い行いをしてもらいたいためである。八わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある。九わたしたちは、自分は弱くても、あなたがたが強ければ、それを喜ぶ。わたしたちが特に祈るのは、あなたがたが完全に良くなってくれることである。一〇こういうわけで、離れていて以上のようなことを書いたのは、わたしがあなたがたの所に行ったとき、倒すためではなく高めるために主が授けて下さった権威を用いて、きびしい処置をする必要がないようにしたためである。

二最後に、兄弟たちよ。いつも喜びなさい。全き者となりなさい。互に励まし合いなさい。思いを一つになささい。平和に過ごしなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいて下さるであらう。三きよい接吻をもつて互にあいさつをかわしなさい。聖徒たち一同が、あなたがたによろしく。

三主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。